HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	日本近代児童文学における〈死と生命の表現〉の研究 ： 『赤い鳥』童話作品を中心として［論文内容及び審査の要旨］
Author(s)	王, 玉
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第12954号
Issue Date	2018-03-22
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/70204
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Wang_Yu_abstract.pdf, 論文内容の要旨

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）　　氏名：　王　　玉

学位論文題名

日本近代児童文学における〈死と生命の表現〉の研究
――『赤い鳥』童話作品を中心として――

・本論文の観点と方法

本論文は日本近代を代表する児童文学雑誌である『赤い鳥』に掲載された多数の作品を対象として、作品の分析と解釈に基づき、そこにおける死と生命の表現の本質と諸様相を解明し、日本近代児童文学の重要な課題としてこの問題を浮き彫りにするものである。一般に人間の生を主要な対象とする文学の研究において、死と生命の表現は常に注目され活発に追究されてきたが、児童文学の分野においては未発展の感が否めない。特に児童文学研究における死の表現の研究は、生命との関わりにおける本質的な部分においても、また個別の作家・作品研究の水準においても十分に考慮されてきたとは言えない。本論文はこの観点から、従来の研究史における欠落を埋めることを目標として構想されたものである。

本論文の方法は、日本近代の児童文学作品の中で描かれる死の表現に注目し、その描かれ方や表現手法の特徴、また生命との関係などを解明し、それを通して社会における子どもの位置づけやそこに込められた作者の意図などを究明することである。研究対象としては、大正時代から昭和初期にかけて発行された『赤い鳥』所載の童話作品を選び、現在よりも死が子どもの身近にあった時代における死と生命の表現を解明する。その過程において創作童話のみならず西洋の昔話の再話作品にも注目し、また、アンデルセン童話やキリスト教、あるいはスピリチュアリズムなどの受容にも触れ、さらに昔話の構造分析の理論や児童心理学なども援用して解釈を試みる。これに加えて、個々の作品にも少なからず影響を与えたと推定される、主宰者鈴木三重吉による『赤い鳥』の編集方針についても検証し、作家・作品研究のみならず、社会における子ども観との関わりからもこの課題を論じている。これらのことは結果的に、従来は純真無垢な子ども観を偏重したとされる『赤い鳥』の童心主義の批判的な再評価にも繋がるものである。

・本論文の内容

序論において上記のような観点と方法を提示し、本論は第一部「『赤い鳥』における〈他者の死〉の問題」と第二部「『赤い鳥』童話における〈子どもの死〉の問題」の二部構成となっている。第一部の第一章から第五章においては、『赤い鳥』に掲載された昔話の再話作品および創作童話の中における〈他者の死〉に焦点を絞り、身近な人や動物の死に対する子どもの向き合い方がどのように描かれているかを検討している。第一章では、『赤い鳥』に掲載された欧米の昔話の再話作品における、〈殺す〉〈殺される〉〈食べる〉〈食べられる〉場面に焦点を当て、それらの描写の特徴を『赤い鳥』の編集方針との関係から分析する。第二章では、『赤い鳥』に掲載された創作童話作品における、子どもの身近にいる動物の死と、それに対する子どもの感情の描写の分析を通じて、『赤い鳥』の創作童話作品の芸術性を追究した。第三章では、森田草平の創作童話「鼠のお葬ひ」を対象に、子どもの遊びと動物の死との関係や、子どもによって遊びの最中に殺された動物の、物語における位置づ

けの分析を試みている。第四章では、『赤い鳥』に掲載された童話作品の中で、子どもが他人の死に直面する作品に注目し、(1)〈他者の死〉と物語の意図、(2)社会批判および文明批判としての〈他者の死〉、(3)〈他者の死〉に遭遇した子どもと喪失体験に関わる感情表出という三つの観点から、子どもと〈身近な人の死〉との関わりについて究明した。第五章では、宇野千代の「三吉とお母さん」に描かれた三吉と母親の死別の検討を通じて、『赤い鳥』童話作品における親子の死別をめぐる表現の特徴と、児童文学におけるその意義を明らかにしている。

続く第二部の第六章から第一一章においては、『赤い鳥』所載の創作童話の中の〈子どもの死〉に焦点を当て、子どもの目から見た死の描かれ方の特徴や〈子どもの死〉に込められた作者の思いなどを究明している。第六章では、『赤い鳥』童話作品における〈子どもの死〉の表現を、(1)超自然的な要素を含んだ子どもの死、(2)日常世界における子どもの死、(3)子どもの目から見た子どもの死の三つに区別し、それらの特徴を個々の作品の分析を通じて論じている。第七章では、キリスト教徒としても知られる宮原晃一郎の「身に咲いた花」を対象として、札幌聖公会における実地調査の成果も踏まえ、宗教的要素の強い作品における〈子どもの死〉の描かれ方の特徴、およびそれと宗教との関係を検討した。第八章では、下村千秋の「曲馬団『トッテンカン』」を対象に、創作童話が昔話の何を踏襲し、どのように独自性を出しているのかを物語の機能の観点から分析している。第九章では、加能作次郎の「少年と海」を対象に、童話作品における子どもの〈死〉に対する認識および心理とそれらに基づく言動、そして〈子どもの死〉に関する描写の特徴を、児童心理学の理論などを援用しながら検討した。第一〇章では、『赤い鳥』に掲載された坪田譲治の童話「小川の葦」における〈子どもの死〉をめぐる表現の分析を通じて、坪田の童話における〈子どもの死〉という主題の位置づけや、同じ時期に書かれた坪田の他の作品の〈子どもの死〉表現との異同を考察した。第一一章では、『赤い鳥』に掲載された小川未明の「町の天使」と「金の輪」という二つの創作童話で描かれた〈子どもの死〉の比較分析を中心に、『赤い鳥』の未明童話における〈子どもの死〉の描写の特徴や、未明童話における〈子ども像〉の変遷等を概括している。

以上の追究を踏まえ、結論においては、一般に主宰者の鈴木三重吉が童心主義を提唱したことや、小川未明や北原白秋といった浪漫主義的な作家の発表の舞台でもあったことから、主として大正時代の童心主義児童文学運動を牽引する雑誌とされて来た『赤い鳥』において、実際にはそれにとどまらない極めて多様な死と生命の表現が認められることが総括された。すなわち『赤い鳥』の童話作品には、(1)子どもには特有の認識や行動の仕方があること（第二章、第九章)、(2)死は必ずしも生の終焉ではなく、時間と空間を超えた新たな関係性を生み出す契機となる場合があること（第二章、第一〇章)、(3)読者に死・生あるいは死後の世界についての思考を促すこと（第三章)、(4)子どもが後悔・反省・悲しみ・喪失感など複雑で豊かな感情を持ち、他者が抱く感情への共感も呼び起こすこと（第四章)、(5)経済的な利益や有用性が優先される社会への批判、ひいては近代文明そのものに対する批判（第四章、第八章)、(6)子どもの純真さ、無垢さを称えること（第七章)、(7)生の意義を理解させること（第一一章）などの多彩な死と生命の表現が認められるとされている。作中で描かれた子どもが童心主義の唱える純真無垢な子ども像には一概に当てはまらない多様な側面と複雑な感情を持つことが論証され、たとえば自分本位な一面や無邪気さゆえの残酷な一面を見せる子ども像などが確認された。それらの多様な子ども像は、豊かな空想や芸術性の追求を編集方針とする『赤い鳥』における、現実性の追求の現れとして認められる。最後に今後の課題として、死と対になる生に関して、やや手薄となった感があるため、より充実した追究を心掛ける旨付記されている。